



第七十五號 (第十六卷)

昭和十二年二月號

黄道光學界の一飛躍へ

山本一清

去る八月月上旬、ベルギー國アントワープ市の Felix de Roy 氏より突然ながら來信があつて、七月中旬のパリ市に於ける國際天文同盟總會の模様を知らせて來た。其の文中に、書かれてある三つの重大項目がある。それは

- (1) 國際天文同盟の流星委員長オリギヤ1氏が辭職したこと、
- (2) 従つて其の後任にドロワ氏が就任したこと、
- (3) こんど黄道光委員會が組織されることが決議されたこと、

そして、此の黄道光委員として取り敢へず推薦された者は

C. Hoffmeister 氏 (獨), Donitch 氏 (ルーマニヤ)
Cap 氏 (ブラジル), 山本一清氏 (日本)

更に、此の委員會の委員長に山本が推舉されたが、其れについて、受諾の用意があるか、如何か？ 尚ほ、此の委員會の將來の活動方針やら、計畫やら、又、もつと委員を増員する希望があるなら、進んで申し出て貰ひたいし、とにかく此の新設の委員會の一切の世話を御依頼申したいとのことであつた。

自分は此の手紙を見て、責任の重大なるを思ひ、少々考へざるを得なかつたが、しかし、卒直に言へば、現今、黄道光の觀測や、種々の研究が、最も熱心に行はれてゐるのは、全世界中、わが日本が第一であるから、こうした學的責任を擔當する資格は我が日本に充分にあるわけであるし、現に今年初以來、濠洲方面との協同觀測といふ空前のプログラムも順調に進んでゐるのであつて、此の日濠協同觀測は全部我が花山で集めて、綜合研究をする筈なのだから、此の上に全世界各地からの報告を集めることも、研究上の便宜のみならず、手數上にも便宜が多いことなど考へ、遂に自分は此の重責を引き

受ける旨を先方へ答へてやつたのであつた。

ドロワ氏は、自分は未だ一度も會つたことは無いが、ベルギーの觀測者として、其の名は二十年も以前から知つてゐるし、又、自分がヤキーイス天文臺に滞在中に世話になつた G. Van Biesbroeck 教授が同じベルギー國出身である因縁で、1924年の秋、歐洲巡遊中、ゲンピル氏のすゝめにより、十二月5日、アントワープ市郊外 Deurne 町を訪ねて見たが、あひにく、同氏が移轉した後であつたので、會へなかつた記憶を持つてゐる。〔天界第56號第340頁〕ドロワ氏は其の當時から變星や流星の熱心な觀測者であつた。

自分が今回上記の如く黄道光委員長に推擧されたについては、國際天文同盟の總幹事 F. J. M. Stratton 氏の盡力があつたのだらうと思ふ。何となれば、さきに日濠協同觀測の斡旋をしたのは此のストラトン氏であり、従つて、我が日本で、黄道光の觀測が如何に熱心に行はれてゐるかを、最もよく今知つてゐるのはストラトン氏だからである。

そもそも、黄道光が學界の注意を惹くに至つた最初は、かの Perry 提督に率ゐられて嘉永6年に米國から日本へやつて來た四隻の黒船艦隊に乗つてゐて、印度洋上を航海中、幾百回にも黄道光の觀測をやつた G. Jones 牧師の報告が大部のものとなつて出版されたことであつた。其れから、西洋でも黄道光の觀測は所々で行はれるやうになつたのは言ふまでもないけれど、英米獨何れの國でも、言はゞ單に僅かの人々が時々思ひ付きで之れを行ふといふに止まり、決して組織的に誰もやらなかつたと言つて好い。強いて言へば、英國の B.A.A. 協會あたりで、オリオンと共に黄道光の觀測部が多少活躍し、今までに同協會から數回にわたり觀測報告を出してゐるに過ぎない。

之れ等に比べると、我が日本では、諸外國よりも緯度が低い關係上、日頃から黄道光が誠によく見え、觀測も可なり熱心に行はれてゐるのは、喜ばしいことである。——尤も、しかし、日本人で眞面目に黄道光を觀測し始めたのは誰か？又其れは果して何年頃からであるか、明らかでないが、しかし、自分などは、たしか、1910年頃から京都の空で冬の日によく見たことがあり、朋友たちにも之れをすゝめた事の經驗を有つてゐる。自分として最も鮮やかに黄道光の毎日毎時の推移を觀測したのは、1914年一二月頃、京都大學の運

動場で緯度観測中、幾夜にもわたつて西の空に見たものであつた。(京都も、其の頃は、夜の電飾など殆んど無くて、こうした微光の天體観測が容易であつた。)其れから、1914—1916年、水澤の緯度観測所にゐた頃も、1916年以後に京都に歸つてからも、黄道光は常に心に惹かれるものの一つであつた。それから1920年に天文同好會を創立した時にも、多くの同志に此の奇現象を見ることをすゝめ、何日だつたか、岡山で冬の日天文講習會に出張中、市中からスバラシイ黄道光を水野千里氏等と共に見たことがある。其の頃、長野縣の三澤勝衛氏が可なり熱心に黄道光を毎夜観測された。

花山天文臺が出来た最初は、この山の上から、西にも東にも黄道光がよく見えた。其れは1929年の末であつた。しかし、其の後、京都の空は急に電飾で明るくなり、西の宵天は全く駄目となり、今は只、東の天の黄道光のみが見えるに過ぎない。しかし、其の代り、1931年頃から東亞天文協會の會員たちの中に黄道光の観測者が急に増し、荒木健兒氏や龜井壽彦氏等の示導を受けて、非常に有力な組織のものとして發達して來た。

遂に此の天文協會の観測報告が立派な形を以つて國內國外に發表されるに至り、先づ之れは米國の Glanville 氏に知られ、それにより直接間接に之れは國際的存在となるに至つたのである。

日本に於ける最近年の黄道光研究上、特に目立つたエポック的のものを數へて見ると、

- A) 1922年 三澤氏の組織的観測、
- B) 1922年 天文同好會観測部に黄道光課を設置、
- C) 1931年 龜井荒木兩氏の同時観測による變動や消長の發見、
- D) 1931年 花山天文臺で黄道星圖の出版、
- E) 1932年 石山に於て黄道光會議、
- F) 1932年 倉敷天文臺より黄道光課通信の發刊、
- G) 1932年 渡邊資金受領、
- H) 1932年 米國カーネギー資金受領、
- I) 1932年 第二極年観測補助金受領、
- J) 1935年 日濠協同観測開始。

さて、こゝに、上述の如く、天文同盟國際の黄道光委員會開設に際し、其の委員長が日本人から推舉せられるに至つたのであるが、自分は、之れを以

つて、嘗に我が日本の學界のためのみならず、世界の黄道光學界の一飛躍として見たいのである。何となれば、黄道光といふ現象は、今日尙ほ觀測上、又、研究上、未知の問題を多く有つてゐるに拘らず、天文學上からも、一般の地球物理學上からも、言はゞ繼子扱ひされてゐた傾きがあつて、未だ未だ本氣に研究する人が少なかつた次第である。従つて、此の黄道光の問題を取り上げて、重大視し、國際天文同盟の中に新しく一委員會が開設されることは、實は、「まだまだ」といふ風に自分等は考へてゐたのであるが、しかし、愈々こうした委員會が出來上つて見ると、之れは實に世界の學界の一機運だといふ感を深くせざるを得ない。

自分としては、此の機運を進め、更に發展させるため、是非大いに奮勵努力しなければならぬと思ふ。

黄道光は、今日の學界から見ると、

- (1) 太陽系の構造上の一問題であると同時に、
- (2) 地球の上層大氣と關連する多くの問題を有し、
- (3) 其の距離や廣袤や形狀の問題、
- (4) 其の化學的、並びに物理的成份の問題、
- (5) 光學上の諸問題、
- (6) 變動や消長の問題、
- (7) オーロラとの關係、
- (8) 一般の夜空光との關係、
- (9) 太陽活動との關係、
- (10) 月との關係

等々、實に多種多様の、しかも可なり實際的、實用的な諸問題を多く有つてゐる點に於いて、人生との關係は豫想以上に大きいと言はねばならない。

之等の徹底的究明のために、吾人は我が國內に、朝野の援助と了解とを得て、特に新しく一研究所を開設し、研究と觀測とを勵むと共に、世界の同學者と連絡提携し、學術の進歩と國威の發揚とに貢獻したいと思ふ。